

## はじめに

その昔、中国のとある商人が言った。「この矛はどんな盾でも突き破れる」と。そしてその商人はこんなことも言った。「こちらの盾はどんな矛で突かれても穴が開かない」と。それを聞いた客人は「じゃあ、その矛でその盾を突いたらどうなる？」商人はうなだれた。これが矛盾という言葉の由来。われわれは、現代の日本でさまざまな矛盾を見つけた。

『ほこ×たて』の初回放送は、このようなナレーションではじまる。それは「誰も見たことのない番組をつくりたい」という、おそらく制作者なら誰もが夢見る企画が、かたちになった瞬間だった。

古代中国の故事が、われわれ現代人の心にも響くのは、そこにどんな時代や国にもあてはまる情景が描かれているからではないだろうか。このエピソードで商人は、売り文句の「つじつまの合わなさ」を指摘され、うなだれる。しかしもし、矛や盾を丹精込めて作り上げた職人たちが、それぞれ同じ文句を言いあって譲らなかつたらどうだろう。前代未聞の勝負が繰り広げられるのではないか。こうした着想から生まれた「対決型バラエティー」は、放送業界に徐々に新風を吹き込んだ。

バラエティーには世の中を窮屈にしている常識や社会通念を揺さぶる力がある（決定第7号「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」9ページ）。『ほこ×たて』はまさに、「矛盾が矛盾ではなくなる」新たな世界をわれわれに見せてくれた。合理主義優先の社会の影に隠れていた「物づくりの面白さ、人の情熱のすばらしさ」に光を当て、わくわくしてテレビの画面に見入る感覚を思い出させてくれたのだ。2012年の日本民間放送連盟賞テレビエンターテインメント番組部門の最優秀賞にも輝いた。

とは言え、『ほこ×たて』のような「誰も見たことのない番組」にはいくつものリスクがある。まず、番組の核となる対決が実現可能なものかという本質的なリスクである。次に、対決ごとに新しいルールを設定しなければならないので、それを制作関係者で共有して、さらに視聴者にも理解を促すのが難しいというリスクもある。すでにルールが確立したスポーツを放送するのは、話が違うのである。

さらに、視聴者に好意的に受け入れられてレギュラー番組になり、ゴールデンの時間帯に昇格するにしたがって、番組にはさまざまな要求が突きつけられる。「視聴率の維持・向上」はその最たるものだ。それに応えようとするうちに、番組内容や作り方が変わっていくケースは少なくない。小さい価値観のズレが、いつの間にか番組の大前提を揺るがすほどのリスクになる場合もあるだろう。

バラエティーは「危ういバランスの上に乗っている」（決定第7号、5ページ）。だからこそ制作者の「絶対これをやりたいという欲求、やり抜くんだという覚悟」、そし

てそれを支える信念や確信がなければ番組は続かない。

フジテレビの看板番組『ほこ×たて』に、最後の日は突然やってきた。出演者による虚偽の編集の公表。そしてフジテレビの調査と番組の打ち切り 『ほこ×たて』は、なぜリスクを乗り越えられなかったのか。なぜバランスが崩壊したのか。そしてその過程には、どのような放送倫理上の問題があったのだろうか。